

佳作 受賞

作品名：「個性」

▽受賞のコメント

私は海外に一度も行ったこともなく、海外の人々と話をするのもほとんどありませんでした。そのため何を書いたらよいか迷いましたが、授業でいろんなことを考えているので、それらで学んだことを記載してみようと思いました。このエッセイがいろんな人に伝わればよいと思います。

▽作品本文

少し前に、「black lives matter」という言葉が流行った。この言葉は、「黒人の命は（も）大切」という意味の言葉である。2012年の黒人差別につながる事件で出来た言葉だが、今年五月二十五日にアフリカ系アメリカ人のジョージ・フロイドさん（四十六歳）が白人警察官に殺害された事件で、この言葉を利用したデモが起きた。このニュースについて、学校の英語の授業でも話し合った。黒人差別は色んなところで起きているのだという。先生が黒人差別や、デモの様子を動画で見せてくれた。「世界が壊れていく感じがする」私は動画の奥で起こっていることを見てそう思った。悪いこともせず警察に取り押さえられる黒人、デモによる銃撃の音、燃える街。私の住む町では考えられないような出来事が最近世界では起きている。同じ地球上での出来事。そう考えると恐ろしかった。まるで紛争のようだった。このデモがこれからも続いたらその国はどうなるのだろう。差別と偏見で罪のない人が殺される未来になったらどうしよう。それがアジア人差別で私たちに向けられるものだったらどうしよう。私はそう考えた。恐らく、住みにくく、未来に生きる子供たちも今の私と同じ様なことを考えるのではないかと思う。そんな未来を作って後世に残してはいけない。

しかし、差別を無くすことは簡単ではない。多くの人々は偏見や第一印象でその人を決めてしまうと思うからだ。最近では、SNSでの誹謗中傷が問題となっている。それによって命を落とす人も増えている。これは日本だけでなく、世界中での問題である。これも、本人と話したこともない人が、その人を偏見で傷つける立派な差別だと思う。気づかずに差別発言をしていないだろうか。たとえポジティブな言葉でも、相手が不快になってしまう場合があるのだ。今、私たちが出来る差別と偏見のない世界を作るには、まずは私たちが身の回りの人を偏見による差別で悪者にしないことだと思う。単純に聞こえるかもしれないが、私たちがよくやってしまうことではないだろうか。例えば、学校で見かけた先生を「あの先生怖そう」と思い、「あの人が〇〇らしいよ」と根拠のないことでその人が傷つく様なことで盛り上がるのは無意識にその人を悪者に行っている。その人をよく知らずに根拠のない偏見で決め付けるのは、差別へとつながってしまう。差別は、人の人権を奪ってしまうことにも繋がる。また、女尊男卑や子供差別、障害者などへの差別も多く存在している。私は、小学校の時に差別的発言で傷ついた経験がある。私の両親は高年齢出産だったので、友達や同級生の両親より年齢が高い。私自身、授業参観や学校行事のときに周りの目が怖くて、来て欲しいと思わなかった。実際に、お父さんをおじいちゃんと勘違いされた時は、とても惨めな思いになった。しかし、当時一番仲の良かった友達には、お母さんがいなかった。私は可哀想とは1ミリも思わなかった。そこで初めていろんな家庭があるのだ、と自分の両親を理解できた。私たちは1人1人の個人の状況を理解し、個性の良さを肯定してあげることが大切だと思う。そうすることで、ストレス社会と言われている日本の現状を変えていくことができるのではないだろうか。

まずは、差別のない日本を作りたい。1人1人が自分に自信を持って生きやすい社会にしたい。日本を良くすることが世界へのアピールとなると思う。しかし、日本を動かしているのは日本の政治である。私たち若者が選挙に参加することが良い日本を作る小さな第一歩であるのではないか。十八歳になったら、自分の考えと意思をもって、選挙に行き、政治に参加する意思を行動で示していくことを大切にしたい。



富山国際大学付属高等学校
2年 石崎 美咲 さん